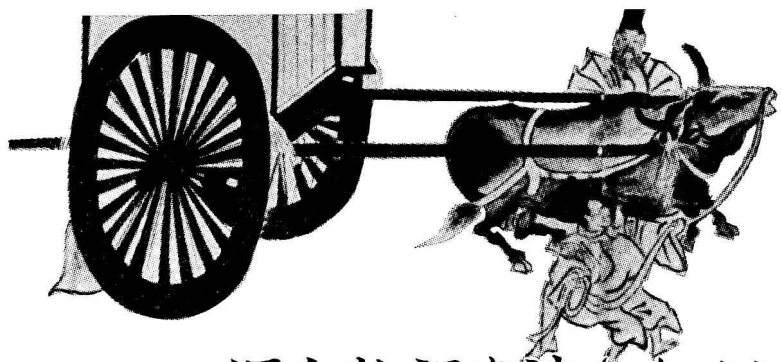


# 源氏物語を読むために

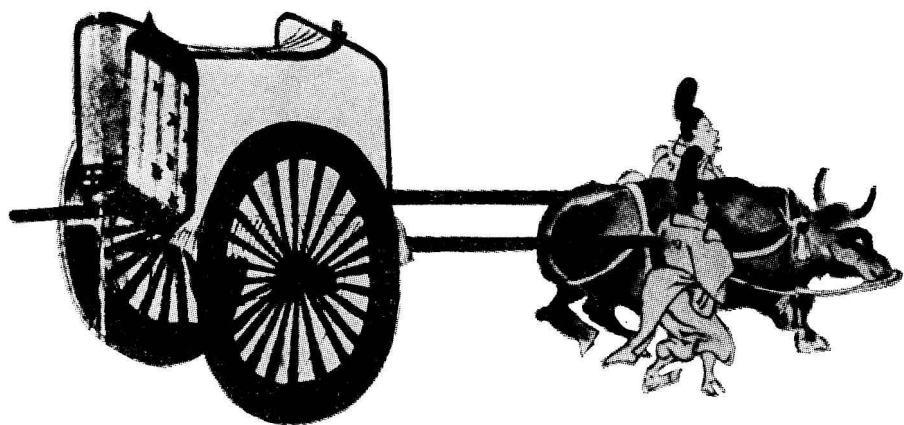
西郷信綱





# 源氏物語を読むために

西郷信綱



平凡社

西郷信綱（さいごうのぶつな）

1916年生。東京大学文学部卒。専攻、古代文学。著書『古代人と夢』（平凡社）、『神話と国家』（平凡社）、『古事記注釈』（平凡社）、『古事記研究』（未来社）、『詩の発生』（未来社）、『日本古代文学史』（岩波書店）、『梁塵秘抄』（筑摩書房）、『古典の影』（未来社）ほか。

源氏物語を読むために

定価 1700円

著者 西郷信綱

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

郵便番号 102 東京都千代田区三番町 5 番地

振替 東京 8-29639 電話 (03)-265-0451

印刷 星野精版印刷株式会社

製本 株式会社石津製本所

発行日 1983年1月20日 初版第1刷

1984年3月30日 初版第2刷

© 西郷信綱 1983 Printed in Japan

不良本のお取替えは直接読者サービス係まで  
お送り下さい（送料は小社で負担いたします）

目

次

|     |                 |     |
|-----|-----------------|-----|
| 第一章 | 一つの視点……………      | 5   |
| 一   | 音読か黙読か          |     |
| 二   | 作者と語り手の関係       |     |
| 三   | 物語と女            |     |
| 四   | 小説史のなかで         |     |
| 第二章 | 《公》と《私》の世界…………… | 31  |
| 一   | 《私》としての後宮       |     |
| 二   | 作者の眼            |     |
| 三   | 恋愛と色好み          |     |
| 第三章 | 色好みの遍歴……………     | 57  |
| 一   | 雨夜の品定め          |     |
| 二   | 最初の冒険           |     |
| 三   | 情事と乳母子          |     |
| 四   | 「やつし」の世界        |     |
| 五   | 「をこ」の物語         |     |
| 六   | 附『新猿楽記』のこと      |     |
| 第四章 | 空白と脱線と……………     | 95  |
| 一   | 空白について          |     |
| 二   | 脱線について          |     |
| 第五章 | 夢と物の怪……………      | 109 |
| 一   | 『源氏物語』と『雨月物語』   |     |
| 二   | 心の鬼             |     |
| 三   | 霊の病い            |     |
| 四   | 過渡期の悲劇          |     |
| 第六章 | 主題的統一について……………  | 133 |

- 一 危険な関係
- 二 永遠の女性ということ
- 三 政治小説として
- 四 罪と運命と

第七章 古代的世界の終焉……………157

- 一 孵化作用
- 二 皇女のゆくえ
- 三 破局のはじまり
- 四 大いなる破局
- 五 時間と空間の軸

第八章 宇治十帖を読む……………187

- 一 宇治と「憂し」
- 二 結婚を拒む女
- 三 人物の対照性
- 四 端役たち
- 五 開かれた終り

第九章 文体論的おぼえがき……………217

- 一 パロディとしての『竹取物語』
- 二 『蜻蛉日記』をめぐる
- 三 『源氏物語』の文体に近づくために

第十章 紫式部のこと……………241

- 一 歌と散文と
- 二 知識人と芸術家の共存

あとがき

カバー及び大扉は『年中行事絵巻』（田中家蔵）  
表紙は『源氏物語絵巻』（徳川黎明会蔵）

# 第一章 一つの視点





## 一 音読か黙読か

『更級日記』の作者が心ときめきながら、やっと手に入れた『源氏物語』に読みふけたという話です。すでに世間周知であり、今さら引きあいに出すのも気恥ずかしいくらいだが、有名だからといってその意味が正當に汲みとられているとは限らない。

はしるはしる僅かに見つ、心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうち、に打臥して、引出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目のさめたるかぎり火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづからなどは空に覚え浮ぶを、いみじき事に思ふに、……

私の結論をさきにいえば、右の一節は平安朝の物語が密室のなかで独り読まれた消息をつたえる証言として、もっと重んじらるべきであり、少くともそれは『源氏物語』のまさしく要求するところの読みかたであつただろうということである。宗教的悟りの境地から来しかたをふりかえるこの日記に

は、過去の自分を劇化しすぎる気味がある。右の一節にしても、黄色の地の袈裟を着た僧が夢にあらわれ「法華經五の巻をとく習へ」と告げたという話がすぐこれにつづき、物語へのかつてのよしなき愛着心を新たな道心とあえて対比させようとしている。だからいささか割り引かねばならぬ点もあるわけだが、しかし王朝時代の一人のうら若い女が、物語の作り出す世界に魅入られていった折の怪しい恍惚感が、ここにかなり生き生きとかたられてゐるのは疑えない。「はしるはしる」は走り読みではなく、「心走り」という語があるのからも分るように、わくわくしながらの意と解される。

ところが一方、物語は音読されたとする有力な説があり、それによると『更級日記』の作者を「物語愛読者の典型」と見るのは「誤り」ということになるのだが（玉上琢彌『源氏物語研究』）、果たしてどうであろうか。まずそのへんのことから考えてみよう。

活字文化に飼いならされた目で平安朝の物語を眺める世の傾向を訂正しようとするかぎりでは、この音読論は有益な提案であった。とりわけ平安朝の物語が、活字文化の申し子ともいふべき近代小説とは性質を異にすることをいい、『竹取物語』あたりの昔物語は女房が姫君に読んで聞かせたものであらうと、その享受のしかたをとり出した点など示唆に富む。印刷術の発明の後と前とで文学作品の質や享受法にあれこれ変化が生じてくるのは当然である。しかし文字によって書かれたかどうか、印刷術に劣らぬ、あるいはそれ以上に大きな変化を人間の想像力にもたらす事件であったことを忘れてはなるまい。この説は、平安朝の物語を近代の小説から峻別しようとするあまり、いつの間にかそれをカタリモノに近づけすぎた嫌いがあるように思う。モノガタリと呼ばれはするけれど、当代の物語はもはや決して口伝えのカタリモノではなく、根本的にはやはり読みものであった。音読というの

は印刷術以前の社会にはひろく見られる現象であって、物語が文字の芸術であったことをそれは何ら排除するものではありえない。文字の芸術である点、平安朝の物語文学、とりわけ作り物語と近代の小説は、カタリモノにたいし、むしろ同類の文芸にぞくするといえることができる。

モノガタリという語は、日常のおしゃべり、話を意味する。例の雨夜の品定めのおしゃべりもモノガタリだし、嬰兒が何かものをいうのをモノガタリすといった例さえ見える。それが物語冊子の意にも用いられるようになったわけだ。というのも仮名文字でそれらが書かれていて、日常の話しぶりにじかに接続するものであったからで、漢文で書かれたものは『将門記』『遊女記』『新猿楽記』などのように当時は「記」と称し、「物語」とは呼ばなかった。漢文は日常のいまわしとは切れているから、「物語」と呼ぶわけにはゆかなかった。つまり当時の「物語」とは、日常語につながる仮名で書かれた話という意であり、その点、欧州中世で公式のラテン語ならぬ俗語で書かれた話がロマンスと呼ばれた消息と揆を一にするものがなくはない。『竹取物語』などが漢学者くずれの男の手になる作であるのはほぼ確かで、文体にも漢文訓読法にもとづく点がかがえるのだが、さればといってそれらが「真名文」で創作され、「漢字を解する女房が大和詞に翻しながら読みあげてゆく」といった風に享受されただろうとするのは、あまりにも空想的ではないかと思う。大和詞で音読されたからではなく、日常語を写す仮名文字で書かれていたからこそ、それは「物語」と呼ばれたはずである。平安朝における物語文学という新たなジャンルの生成が文学史上の大きな事件であったゆえんも、これに関連する。

こう考えてくると、『更級日記』作者を「物語愛読者の典型」とみるのを「誤り」だとし、物語の

本性と言読とを切りはなせぬ一体のものと説くのは、いささか上べにとらわれすぎた見解であることがわかる。平安朝の物語の方が近代の小説より音読に適した文体を有しているのは確かだけれど、そのさい両者を機械的に二分しようとして、物語が仮名文字で書かれた創作であり伝統的なカタリモノでなかった点をないがしろにするならば、それこそ元も子もなくなってしまう。文字を目で読んで誰かに聞かせる音読と、聴衆を前にしたカタリモノや叙事詩の吟誦とは、天地の違いがある。平安朝の物語の本性は、それが文字で書かれた文芸であり、とにかく部屋の中かでその文字を追って読まれ、ことにあったとすべきで、従ってこの読むという行為を音読に限定し、『源氏物語』なども音読されただろうと持っていてゆくのは、どうであらうか。（共通する点があると思われるので、たんに声高に読むのも、声を出して人に読んで聞かせるのも、ここではともに「音読」のなかに入れておく。）

典型、という概念は、事実の次元での平均とか大勢とかとは異なり、一種の理念化・尖鋭化をふくむ音読された事例があるからといって音読こそその本性だと帰結するのは、素朴な事実主義にもとづく短絡的発想にすぎない。問題はかかって作品の質にあるわけで、そういう質から考えて「人もまじらず、几帳のうちに打臥して」読みふけり、「後の位も何にかはせむ」とばかりうつつをぬかした『更級日記』の作者こそむしろ『源氏物語』読者の典型であった、とする方が的中しているように私には思われる。あるいは、かの女はそのようなものとして『源氏物語』を発見し経験したのだといいかえてもいい。そこで黙読ということの意味について、以下いささか考えてみる。

話は飛ぶがアウグスティヌス『告白』に、聖アンブロシウスが書を読むにさいし黙読し、「その目はページを追ひ、心は意味をさぐっていたが、声と舌は休んでいた」（山田晶訳、六章三節）さまを記

した箇所がある。これにつき、アンブロシウスの黙読がアウグスティヌスに奇異の感を与えたのは、書物は韻文にせよ散文にせよギリシャ・ローマ時代には声高に朗読されるのが習わしであったからだ」と注されている。事情は日本とても同じであったと思う。『古事記』序にいう、稗田阿礼に帝紀・旧辞を「誦<sup>よ</sup>み習<sup>な</sup>」わしむの「誦<sup>よ</sup>む」が声にかかっていることは明白である。また誦経にたいし読経という。が読経もたんに目で黙って文字を追うのではなく、声に出して一字ずつ読むのである。ヨムという語が一つ一つ数えるのを原義としているのも、ヨムことと声との深い歴史的友情を暗示する。文字ができた後も、この伝統は強く生きながらえる。そして少くとも平安朝ころまでは、漢文だって音読されたはずである。だから平安朝物語が音読されたとしても、何ら不思議ではない。蹟きの石は、それを物語の本性であるかのように持ってゆく点にある。『更級日記』に次のような一節がある。

いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年にひとたびにても通はし奉りて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心細げにて、めでたからむ御文などを、ときどき待ち見などこそせめ、とばかり思ひつづけ、あらましごとにも覚えけう。

作中人物とのこうした幻想的な自己同一化は、「声と舌」を休ませ「目と心」で孤独に物語を読んだせいであって、音読ないしそれを聴くことによつては、とうてい得られないだろう。当り前になりすぎているため、つい忘れがちだけれど、「目と心」を以てする黙読は、精神の内面性が要求すると

この読みかたであり、それは歴史的にみて人間の一つの新しい経験であった。ヨーロッパでも中世になって人びとは黙読することを学んだと指摘されているが、日本のこととして考えれば『源氏物語』こそは、そういう黙読を通してのみ真に享受しうる、おそらくは最初の記念すべき作品であったといえるかも知れない。この作品の蔵する濃密な時間の世界は、音読による享受をほとんど拒むていものだと思われる。作中人物の心のくまぐまに入りこむ屈折した散文で書かれているのも、すでに音読を期待したものでないことを示す。そしてそれはいうまでもなく作者の孤独とも包みあうという関係になっているはずだ。

音読論に関連し、物語絵のことに一言ふれておく。周知のように『源氏物語絵巻』の「東屋」(一)の段に、侍女右近が冊子を開いて読むかたわらで浮舟が冊子絵を見ている場面があるが、これは本文に「絵など取り出でさせて、右近にことば読ませて見たまふに……」(東屋)とあるのに応ずるものである。「絵合」「蛩」の巻などにも『竹取物語』『伊勢物語』その他の絵のことがあれこれ見えており、貴族の子女の間に物語絵の行われていたことがわかる。これが、詞は女房に読ませ本人は絵を見るという享受法と無縁でないのは確かだろう。そして物語音読論はこれを有力な根拠の一つとし、そこに強いアクセントをおくわけだが、しかしこれは最上流の子女たちのあいだのいわば風俗で、物語文学の本性にとって重要な意味をもつかどうかは疑わしいと思う。絵を写すのは詞を写すほど簡単でないからそれがそう普及していたとは考えにくいし、現にさきの浮舟のしている絵冊子も匂宮邸に蔵するものであった。<sup>(1)</sup>

文学のことでいえばそれよりむしろ、『枕草子』に「絵にかき劣りするもの」として「物語にめで

たしといひたる男女のかたち」をあげている方が、ずっと大きな問題を孕んでいる。文芸作品のいわゆる名作が映画化されたのを見てシラけたという話はよく耳にするし、身にそういう覚えのある人も多いはずだが、これは、自由に想像しながら読んでいた作品のポテンシャルティが画面にいきなりお膳立てされて、目の前にさし出されるため起きる現象である。作品の意味は私たちがそれを読む過程にあらわれてくるものだが、とくに小説や物語、つまり虚構を旨とする文芸では、読者の想像の果たす役割が一段と大きくなる。そのことは追いついて考えてゆくつもりだが、物語を読んだときの感じとその絵を見たときのそれとの間にズレがあるのにふと気づき、清少納言はこういう断想を記したのである。<sup>(2)</sup>「桐壺」の巻に、「長恨歌」にくらべ「絵にかける楊貴妃の容貌は、いみじき絵師といへども、筆限りありければ、いとにほひ少し」とあるのも、ほぼ同じ趣といっている。

文学は時間を軸とするのにたいし、絵は空間の芸術である。そのように性質の全く異なる二つの芸術が、そういつまでもめでたく結びついておれるはずがない。思うに浮舟の見ていたような物語絵は《そしてそれから》という風に事件が同一平面で継起し、したがって空間的にそれをたどることのできる短篇ものに応ずる形式であったに違いない。『源氏物語』のように目に見えぬ心のなかの時間の世界が複雑化し、想像的にそこに入りこむことを読者が要求される長篇になると、物語絵による享受法が通用しなくなるのは当然である。「人もまじらず、凡帳のうちに打臥して」この物語に読みふけたという『更級日記』作者に私が注目するのも、このことにかかわっている。<sup>(3)</sup>



## 二 作者と語り手の関係

『源氏物語』はそれ以前の昔物語にたいし一期を画する作であり、多くの面で伝統的なものから抜け出ていつている。たとえば『竹取物語』や『宇津保物語』の下地をなすのは、紛れもなく旧来の求婚譚である。とくに前者には、口承文芸をそっくり移しとってきてそれに文芸的な脚色を加えたといった趣が強い。『落窪物語』なども、当時ひろく行われていた継子譚の再生と見て誤らない。むしろこれらは歴とした作り物語であって、文学史上それぞれ固有の地位をしめるものではあるが、筋立てや構想に伝統とのつながりがはつきり見てとれる点で共通している。それにたいし『源氏物語』の場合には、その下地になっているものが何であるかそう簡単には取り出せないのである。求婚譚や継子譚の契機もはたらいっているけれど、それはごく一部の個々の話についてであり、全体がそれらで貫かれているわけでは決していない。個々の話にしても、伝統は見違えるばかりに変容され、むしろそれとの臍の緒が切れたかたちで新たな布地のなかに織りこまれ、それが過去の作品の批判とさえなっている。こうして方法的に伝統から抜け出た新しみ (novelty) を持っている点、『源氏物語』は文字通り一つの novel であったといえる。もともと小説は劇や詩歌と違って規範をもたず、むしろ規範的なもの